

の動きを比べると、両者の間に特に目立った違いはない（Aに占めるBの割合はそれほど変化していない）。独自給付費用率の上昇幅が基礎年金費用率の上昇幅に比べて大きいのは、独自給付費用率の水準が高いため、増減差が大きく出るからである。

表 3 5 独自給付費用率の推移

年度	厚生年金	国共済	地共済	私学共済	農林年金
平成	%	%	%	%	%
7	9.9	15.2	10.3	7.5	15.0
8	10.6	15.6	10.1	7.8	16.0
9	11.1	15.5	10.4	8.4	17.3
10	12.0	15.5	11.3	8.9	18.4
11	12.2	16.2	11.9	9.3	18.6
12	13.0	16.6	12.5	9.7	19.0
13	13.7	17.1	13.0	10.1	19.8
対前年度増減差 (ポイント)					
8	0.7	0.4	△ 0.2	0.3	1.0
9	0.5	△ 0.1	0.3	0.6	1.3
10	0.9	0.0	0.9	0.5	1.1
11	0.2	0.7	0.6	0.4	0.2
12	0.8	0.4	0.6	0.4	0.4
13	0.7	0.5	0.5	0.4	0.8

図 9 独自給付費用率の推移

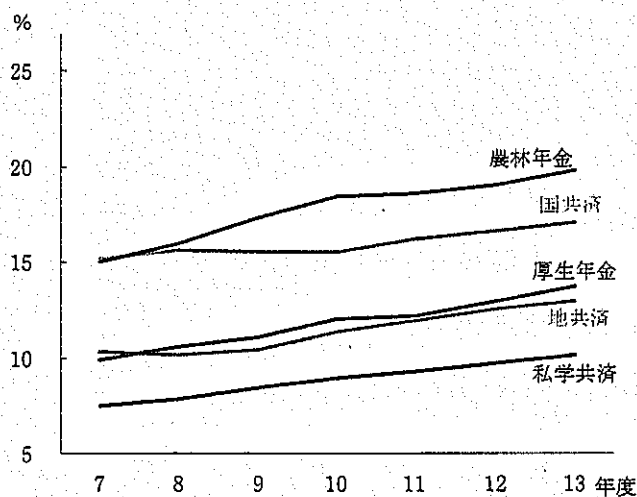


表 3 6 基礎年金費用率の推移

年度	厚生年金	国共済	地共済	私学共済	農林年金
平成	%	%	%	%	%
7	3.8	3.5	2.9	3.3	4.3
8	4.0	3.6	3.0	3.4	4.4
9	4.0	3.7	3.1	3.4	4.4
10	4.4	3.9	3.2	3.6	4.6
11	4.7	4.1	3.4	3.8	4.8
12	4.9	4.3	3.7	4.1	5.1
13	5.0	4.4	3.7	4.2	5.5
対前年度増減差 (ポイント)					
8	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1
9	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0
10	0.4	0.2	0.1	0.2	0.2
11	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2
12	0.2	0.2	0.3	0.3	0.3
13	0.1	0.1	0.0	0.1	0.4

図 1 0 基礎年金費用率の推移

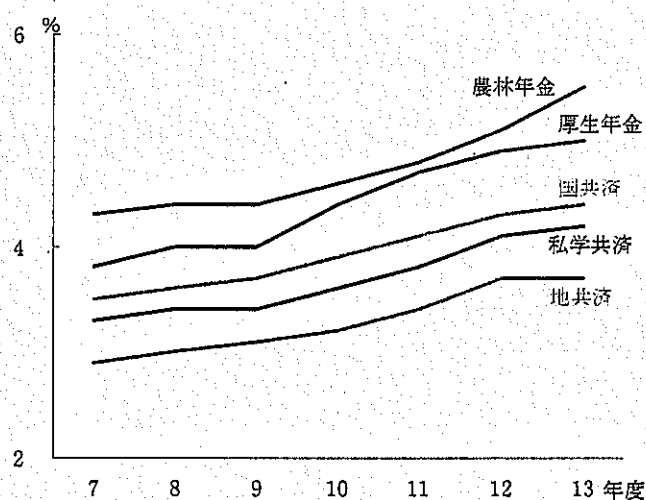


表37 総合費用率、独自給付費用率の分子、分母

年度	厚生年金	国共済	地共済	私学共済	農林年金	対前年度増減率				
						厚生年金	国共済	地共済	私学共済	農林年金
	億円	億円	億円	億円	億円	%	%	%	%	%
A 実質的な支出－国庫・公経済負担（総合費用率の分子）										
7	172,834	9,411	22,208	1,774	3,262					
8	186,631	9,848	22,486	1,870	3,479	8.0	4.6	1.3	5.4	6.7
9	193,579	9,926	23,479	2,012	3,664	3.7	0.8	4.4	7.6	5.3
10	208,061	10,187	25,640	2,164	3,867	7.5	2.6	9.2	7.6	5.5
11	211,624	10,739	27,287	2,296	3,921	1.7	5.4	6.4	6.1	1.4
12	221,574	11,350	28,470	2,454	4,000	4.7	5.7	4.3	6.9	2.0
13	231,240	11,759	29,479	2,570	4,156	4.4	3.6	3.5	4.7	3.9
B 実質的な支出－国庫・公経済負担－基礎年金拠出金×2/3（独自給付費用率の分子）										
7	125,253	7,662	17,307	1,232	2,535					
8	136,373	8,026	17,334	1,305	2,724	8.9	4.7	0.2	5.9	7.5
9	142,131	8,027	18,132	1,426	2,915	4.2	0.0	4.6	9.3	7.0
10	152,632	8,137	19,935	1,542	3,097	7.4	1.4	9.9	8.1	6.2
11	152,801	8,547	21,191	1,627	3,114	0.1	5.0	6.3	5.5	0.6
12	160,726	8,994	22,002	1,719	3,147	5.2	5.2	3.8	5.7	1.0
13	169,208	9,354	22,905	1,812	3,252	5.3	4.0	4.1	5.4	3.4
C 基礎年金拠出金×2/3										
7	46,770	1,749	4,901	542	727					
8	49,413	1,822	5,152	565	755	5.7	4.1	5.1	4.2	3.9
9	51,449	1,898	5,347	586	749	4.1	4.2	3.8	3.8	△0.8
10	55,430	2,050	5,705	623	771	7.7	8.0	6.7	6.2	2.9
11	58,823	2,192	6,096	669	807	6.1	7.0	6.9	7.5	4.7
12	60,848	2,356	6,469	735	853	3.4	7.5	6.1	9.9	5.6
13	62,032	2,405	6,574	758	904	1.9	2.1	1.6	3.1	6.0
D 標準報酬月額総額（総合費用率・独自給付費用率の分母）										
7	1,238,385	50,431	168,207	16,431	16,873					
8	1,259,298	51,314	171,635	16,745	16,986	1.7	1.8	2.0	1.9	0.7
9	1,281,286	51,893	174,521	17,004	16,898	1.7	1.1	1.7	1.5	△0.5
10	1,272,631	52,368	176,293	17,279	16,787	△0.7	0.9	1.0	1.6	△0.7
11	1,247,826	52,854	177,712	17,500	16,714	△1.9	0.9	0.8	1.3	△0.4
12	1,240,660	54,319	176,426	17,777	16,598	△0.6	2.8	△0.7	1.6	△0.7
13	1,231,930	54,583	176,435	18,016	16,410	△0.7	0.5	0.0	1.3	△1.1
B/A (%)										
7	72.5	81.4	77.9	69.5	77.7					
8	73.1	81.5	77.1	69.8	78.3					
9	73.4	80.9	77.2	70.9	79.6					
10	73.4	79.9	77.7	71.2	80.1					
11	72.2	79.6	77.7	70.9	79.4					
12	72.5	79.2	77.3	70.0	78.7					
13	73.2	79.5	77.7	70.5	78.3					

注1 厚生年金の平成8年度以前は旧三共済を含まない。

注2 地共済の標準報酬月額総額は給料総額を標準報酬月額ベースに換算した場合の総額である。

(5) 収支比率 ー各制度とも上昇ー

平成13年度の収支比率は、農林年金が最も高く110.6%、次いで厚生年金102.4%、国共済95.2%、国民年金93.6%、私学共済79.2%、地共済78.3%の順である（表38）。使用した運用収入は、厚生年金と国民年金は時価ベース、共済年金は簿価ベースである。

収支比率の推移をみると、各制度とも上昇傾向にあり、中でも厚生年金・農林年金・国民年金では13年度の上昇幅が大きく、10ポイント以上の上昇となった。これは分母の「保険料収入＋運用収入」の減少、中でも運用収入の減少によるところが大きい（表39、表7）。

表38 収支比率の推移

年度	厚生年金	国共済	地共済	私学共済	農林年金	国民年金
平成	%	%	%	%	%	%
7	69.0	75.1	57.1	55.3	81.0	72.5
8	72.4	76.0	57.3	58.4	87.1	59.1
9	73.8	75.7	57.8	60.6	89.0	71.7
10	80.5	80.8	63.4	64.4	95.5	75.6
11	84.9	85.1	64.6	67.3	98.2	75.3
12	91.0	89.3	72.8	74.3	100.3	80.2
13	102.4	95.2	78.3	79.2	110.6	93.6
対前年度増減差（ポイント）						
8	3.4	0.9	0.2	3.1	6.1	△ 13.4
9	1.4	△ 0.3	0.5	2.2	1.9	12.6
10	6.7	5.1	5.6	3.8	6.5	3.9
11	4.4	4.3	1.2	2.9	2.7	△ 0.3
12	6.1	4.2	8.2	7.0	2.1	4.9
13	11.4	5.9	5.5	4.9	10.3	13.4

表39 収支比率の分母（保険料収入＋運用収入）の推移

年度	厚生年金	国共済	地共済	私学共済	農林年金	国民年金
平成	億円	億円	億円	億円	億円	億円
7	246,410	12,529	38,875	3,209	4,029	21,435
8	255,812	12,959	39,223	3,199	3,994	22,505
9	262,469	13,105	40,643	3,323	4,120	22,858
10	258,315	12,609	40,467	3,359	4,049	23,084
11	249,384	12,623	42,236	3,413	3,993	23,261
12	243,579	12,704	39,128	3,304	3,987	22,507
13	225,901	12,356	37,632	3,244	3,756	20,784
対前年度増減率（%）						
8	3.8	3.4	0.9	△ 0.3	△ 0.9	5.0
9	2.6	1.1	3.6	3.8	3.2	1.6
10	△ 1.6	△ 3.8	△ 0.4	1.1	△ 1.7	1.0
11	△ 3.5	0.1	4.4	1.6	△ 1.4	0.8
12	△ 2.3	0.6	△ 7.4	△ 3.2	△ 0.2	△ 3.2
13	△ 7.3	△ 2.7	△ 3.8	△ 1.8	△ 5.8	△ 7.7

注 私学共済の保険料収入には都道府県補助金を含む。

(6) 積立比率

積立比率は、地共済が最も高く 12.3 倍、次いで私学共済 11.7 倍、国共済 7.3 倍、厚生年金 5.9 倍、国民年金 5.0 倍、農林年金 4.8 倍の順となっている（表 40）。

推移をみると、厚生年金・私学共済・農林年金は低下傾向にある。

表 40 積立比率の推移

年度	厚生年金	国共済	地共済	私学共済	農林年金	国民年金
	倍	倍	倍	倍	倍	倍
平成 7	6.3	7.4	12.2	12.9	5.5	4.1
8	6.2	7.4	12.8	13.0	5.4	5.2
9	6.1	7.6	13.0	12.7	5.2	4.8
10	6.0	7.7	12.6	12.4	5.1	4.9
11	6.2	7.6	12.4	12.3	5.1	5.1
12	6.1	7.3	12.4	11.9	5.0	5.2
13	5.9	7.3	12.3	11.7	4.8	5.0
対前年度増減差（ポイント）						
8	△ 0.1	0.0	0.6	0.1	△ 0.1	1.1
9	△ 0.1	0.2	0.2	△ 0.3	△ 0.2	△ 0.4
10	△ 0.1	0.1	△ 0.4	△ 0.3	△ 0.1	0.1
11	0.2	△ 0.1	△ 0.2	△ 0.1	0.0	0.2
12	△ 0.1	△ 0.3	0.0	△ 0.4	△ 0.1	0.1
13	△ 0.2	0.0	△ 0.1	△ 0.2	△ 0.2	△ 0.2

(7) 財政指標でみた各制度の特徴

最後に、年金扶養比率、総合費用率、独自給付費用率、収支比率、積立比率が全体としてどうなっているのか、制度相互に「レーダーチャート」で比較をしてみる（図 11）。年金扶養比率は、最も成熟が進んだ段階で 2 になる（2 人で 1 人を支える）として、尺度を定めた。また総合費用率は、最終的には年収の 20%（賞与を含まないベースで 26%）になるとして、グラフでは 26 に対する比の逆数をとった（逆数とするのは成熟が進むに連れ小さくなるようにするためである）。同様の考えで独自給付費用率は 18、収支比率は 100 に対する比の逆数をとった。積立比率については、成熟が進むに連れ小さくなることを考慮して尺度を定めた²⁸。

注 図が見易くなるようにするための処理を行っている。

結果は図のとおりで、レーダーチャートの形状は、①国共済・地共済、②厚生年金・私学共済・農林年金に 2 分される。グループ①の国共済・地共済は年金扶養比率のラインがグループ②に比べて突き出ている（成熟が進んでいる）とともに、積立比率のラインが突き出ている（積立金が相対的に多い）。グループ②の 3 制度は、